

小幡

欣治

いづつそう
段六



いごっそう段六

昭和五十一年六月十日 第一刷

著者 小幡 欣治
発行者 浅 沼 博
印刷者 亨 有 堂
製本 田 中 製 本

発行所 日本放送出版協会

郵便番号一五〇

東京都渋谷区宇田川町四一―一

(落丁本・乱丁本はお取替いたします)

検印廃止

つそ

欣治

日本放送出版協会

目 次

一	浮世絵	7
二	五郎七茶碗	24
三	椀投げ入札	41
四	画商志願	59
五	青空展覧会	76
六	不忍池	96
七	唐草模様	114
八	結婚申し込み	133

九 絵のない壁 150

十 浮世亭 168

十一 闇の女 186

十二 ファッション・デザイナー

203

十三 浪花節の女 218

十四 Aライン 235

十五 段六画廊 250

十六 裏方夫婦 266

一 浮世絵

夜の土佐湾である。

月はないが、おびただしい星あかりに、港がボンヤリ浮かんで見える。コンクリートの延びた突堤に、小型の発動機船が一隻横づけにされていた。舷側を打つ波間には、夜光虫が光り、時折、遠く沖合を通る船から汽笛が聞こえた……。

懐中電灯を光らせて、巡回中の警官が一人、突堤を歩いてきた。のったりと揺れる発動機船に電灯を向けていたが、あくびを噛み殺すと、そのまま戻って行った。

暫くしてから、船の中からヌウッと男が首を出した。船長の大滝だ。続いて音吉、そして軍次郎の二人が首を出して、あたりをうかがっていた。

「よし、今のうちじゃ」

大滝の声と同時に、三人は一斉に突堤に飛びおりと、先端の一段低くなった所へ駆けて行った。そこにはこんもりと盛りあがった汚れた天幕布地があった。布地を取っばらうと、中から、いくつものふくれあがった吠^{かみ}が姿を見せた。三人は領きあって、吠に手を掛けようとして

て、大滝が気づいたように暗がりにも声をかけた。

「段六、もう出てきても大丈夫じゃ……段六ッ！」

「どこに居らア？ 早いところ荷積みをせんと間に合わんぞ！」

音吉がどなった。

「ここじゃあ、ここじゃあ」

少し離れた所で声がした。見ると、空の吠を頭からすっぽり被った冠木段六が、吠をはねのけて顔を見せた。とぼけたような声とはうらはらに、ガッシリとした体つきだ。

「敵は去ったか？」

「馬鹿ッ、敵前上陸の練習をしちやるんじゃないンじゃあ。さっさと吠を船に積みこめ、早うせえ、早う」

大滝はいらだって叫んだ。

「いやァ、イリコの臭いがブンブンしてからに、身体中魚くさいちゃ、こりやたまるか！」

段六は服に鼻をくつつけながらぼやいた。

「けんどよ、そのイリコのおかげで、俺もおんしゃも一航海千両の金がふところに入るんじや、魚くさいぐらい我慢せえ、はははは」

音吉は吠を担ぎながら濁った笑い声をあげた。

「滝さん、だれかこっちへ来る！」

軍次郎が頓狂な声でいった。一同はギョッとなって暗闇をうかがった。ライトを消した自転

車を引っぱって男が近づいてきた。

「わしじあ、わしじあ、能茶山町の長峰じあ。どうじあ、荷積みは済んだかや」

大滝ははっとしたように長峰に寄っていった。

「おかげさまであらかた積みこんだ。あとはこれだけじや」

「船は何時出るんじあ？」

「明日の朝、四時にここを出ようと思うちよる」

「と、いうことは、大阪へは明後日の朝、着くわけじあな。大滝さん、一言いっておきたいんじあが、イリコはたしかにわしが売った。けど、こうして船に乗せた以上は、あとは荷主さんであるおまさんのせいよ。俺にはもう一切関係がないきにの、それだけははっきりと断つとくぜ。なにしろ近頃は、闇物資の取締りで、警察が眼の色を変えちゆうきんの」

長峰は抜け目なく笑うと、ポケットから洋モクを出し、皆に一本ずつ渡しながら、段六の顔をみて不審そうな声でいった。

「お前とこは、今日は兄貴の婚礼じやないが？ ええのか、こんなところへ来てても？」

「仕事じやきに途中から抜けてきたんじや」

「お前とこは雄作さんと二人兄弟じやないかよ、用事をすませたら、早う帰っちゃれ。俺もな、近う式をあげるになっちゃうきに、人ごとあ思えんがよ。まア、みんな気をつけてな」

長峰は満足そうな笑い声を残して突堤を戻って行った。

「長峰さんが式をあげると言いよったが、なんの式をあげるんじあ？」

段六は例によってトボけたような声で、音吉にたずねた。

「おまん、知らざったかよ？ 奴はの、近く若宮のお嬢さんと結婚するんじあそうな」

段六は突然、横面を張りとはされたように声を呑んだ。

「おまん、復員したばかりでよう知らんろうけん、若宮さんの家も、気の毒に今じゃ売り喰いの生活での、二進も三進も行かんらしい。奴はそこへつけこんで結婚の申込みをしたんじあそうな」

長峰を送っていった大滝が戻ってきて、口をはさんだ。

「段六、あとは俺たちがやるきん、おまんはひとまず家に帰れ。兄貴の婚礼に顔を出しちゃれと言うちよるんじあ」

大滝たちは吠を担いで船に向かった。段六は手にしていた洋モクに気づくと、矢庭にそれを地面に叩きつけ、軍靴で踏みつぶしながら怒鳴った。

「畜生ッ、馬鹿ったれ！」

冠木家は、四国の高地にあるごくありふれた農家である。今宵は長男雄作の婚礼とあって、奥座敷の方からは、絶え間なく明るい笑い声が聞こえていた。台所では、手伝いにきた近所の女房連が、酒の燗をしたり、かまどに薪をくべたり、大皿に皿鉢料理の盛りつけをしたりして、てんでこ舞の忙しさだった。

「お常さん、酒じゃ、酒じゃ、燗が間に合わな、あと冷やでもええと」

廊下から空徳利を持って小走りにやってきた武藤がいった。大分酔っている様子だ。

「あんたから、ちくとみんなに言うてやってくれんか。なんぼ雄作さんの婚禮でも、この酒は米と交換で、おせきさんが一生懸命集めてきたんじゃきに、ちっとは遠慮して飲めって」

お常は顔をしかめていった。

「ははは、そんなこと言うたら、酒がまずうなるいうてどやされるがよ」

台所で女たちが笑っている時、座敷の方では、雄作が花嫁の昌子とならんで坐り、そのかわらに、母親のおせきと、雄作の子供の七歳になる綾子と五つの雄一が坐り、客の竹川たち七、八名がへよさこい節を合唱していた。

「おせきさん、段六さんが帰ってきたぞ」

お常が慌ただしく駆けてきて叫んだ。

……馬鹿たれが。黙って途中で座敷を抜けたりして、お客さんに失礼じゃないか……おせきは、段六が姿を現わしたという言葉に、ホッとすると同時に、……あれにも分けてやる田圃があればなァ……と、不憫をまじえた嘆息をもらした。……兄の雄作は二人の子供を持ちながら、昌子さんを嫁に貰った。これで段六もこの家に居づらくなるじゃろう。そうじゃ、忘れるところじゃった。若宮の琴江お嬢様がお見えになっているんじゃ。段六には、あっちの方へ先にいって貰わにゃ……おせきは急いで玄関へ向かった。

「えッ？ 俺の部屋で……？」

「こちらから伺わせると言うたんだが、お前に逢って、是非とも頼みたいことがあるとおっしゃっての、先刻からお前の部屋で待っていなさるんじあ」

「俺、井戸端へ行って顔を洗うてくる。それから大急ぎで服を着替えるきに、母ちゃん頼む」うす汚れた部屋で、若宮琴江が綿のはみ出た座蒲団を横に置いたまま、段六の帰りを待っていた。琴江は二十三歳だった。きらきらかがやく黒真珠のような瞳と、整った唇、時々眉をしかめる表情の中に、勝気なものが感じられた。段六はつんつるてんの背広を着て、緊張した面持ちでやってきた。それは二十六歳という年よりもずっと幼く見えた。

「段六さんは、明日の朝大阪へお発ちになると伺うたのですが、まことでございますか？」

「だ、だれがそがいなことを？ 明日の大阪ゆきは、家の者にも内証にしてあるんですが……」段六は声を低めて、思わず廊下の方を伺った。

「ご無理を申し上げてまことに申し訳ないのですが、もし大阪へいらっしゃるのでしたら、これを、大阪難波なんばの酔古堂というお店まで届けて頂けないかと思ひまして、こうしてお願いにあらうたのです」

琴江は、古びた桐箱を段六の前に置いて、自分が行ければよいのだが、汽車の切符もなかなか手に入らないし、なによりも、父が病氣のために、家を留守にするわけにはいかないからと事情を語り、桐箱をあけて、中から掛軸をとり出して、ゆっくりと段六の前にひろげて見せた。それは江戸時代の画家、初代豊国の描いた浮世絵の肉筆だという。

段六は急に照れて、もそもそ後ずさりしながら叫んだ。

「いかんです、お嬢さんもお人が悪い。なんぼ婚礼の晩じゃといつても、そげん昔のパンパンの絵をバァーッとひろげるたあ……そりゃいかんです」

琴江はさとするように静かにいった。

「恥ずかしいとお思ひになるのは、段六さんがそういう眼で、ごらんになるからですわ」

あらためて絵を覗きこんでいる段六に向かって、琴江は父が病氣になったため、能茶山の窯場を手放したこと。父も母もこの絵だけは手放したくないと言っていたが、売らなければ、どうにも仕様のないところまでできてしまったこと。醉古堂は戦前からおつき合ひしている店なので、そこで引き取って貰うことが、この絵にとつても一番いい、と思えると思つた。

「よう分りました。大阪へ着きましたら、その日のうちに、きつと醉古堂さんというお店にお届けいたします。命に代えても、自分はお約束を果たします」

段六は、琴江の嘘偽りのない言葉に泣きたいほどの感動を覚えた。

琴江を送つて表へ出た段六は、星空を仰いで深呼吸を一つすると、思い切つて尋ねた。

「琴江さんは、近く長峰さんと結婚なさると聞きましたが、そりゃまことですか？ もし結婚なさるがでしたら、五十年も一緒に暮らした大事な、大事な、宝物みたいな絵を手放さんでも済むんじゃないかと……いえ、自分は大阪へお届けするのが嫌で言うてるんじゃないありません。

お約束は守ります。けんど、長峰さんという人はなんといつても閨屋の——いや、お金持ちで
すきに、琴江さんがお頼みになれば、ようし、絵は売らんでもよかと言ひに違ひないと思つて

……」

「私……結婚はいたしません。いろいろと噂が流れているようですが、私……あの方は嫌いです」

琴江はきっぱりいい切ると、足早に去っていった。段六はポカンと半ば口をあけて見送っていたが、

「冠木段六ッ、元気に行つて参ります！」

と、大声で言い、琴江の去つた方向に向かつて挙手の礼をした。

座敷の古い柱時計が四時二十分前を指していた。宴は既に終り、家族も寝てしまったようだ。

段六は部屋の襖をそつとあけた。兵隊服姿で、風呂敷に包んだ桐箱を、大事そうに抱えて廊下に出ると、抜き足、さし足で玄関に向かった。

外はまだ暗く、遠く鶏の鳴く声が出た。

夜明けの土佐湾だ。太陽はまだ昇らないが、ベタ凧の海面はほの明るくなつていた。

段六は艀くわに立つて双眼鏡で陸地の方を見ていた。……『商売で、四、五日留守にするきに、心配しないでつかあさい。母上殿、兄上殿、早々頓首、段六』……机の上の便箋に、俺の出てきたことを書いてきたから、家では心配してないだろう。俺にはすることがあるんじや、することが……。

「おい、見張りは俺がやるきに、今のうちにめしを食うちよけ」

船室より大滝が出てきて声をかけた。

「桂浜がだんだん遠ざかって行くのう」

段六は双眼鏡を大滝に渡して船室へ降りて行った。天井の低い三畳ほどの汚ない船室で、音吉と軍次郎の二人が、テーブルの上に、段六の持ってきた風呂敷包みを置いて、ほどこにかかっていた。

「こらッ、なにしよる！」

段六は、いきなり二人を突きとばすと、

「人の物を勝手に開けたりしてからに……あ、あ、あ、闇屋の汚れた手でさわったりしたきに、見てみ、こんなによれたろうが」

「けがらわしういうて、おんしゃじあち闇屋じゃいか」

音吉がせせら笑った。

「このお品はの、おまささんらあのように、無学な人間には関係がないの。今度さわったら、眼がつぶれるぞ。眼だけじゃなぜよ。海が荒れてこの船が沈むぎにの、分ったかや？」

段六は、ほどかれている風呂敷に桐箱を包むと、大事そうに棚の上にのせていった。

夜になって、風が出てきたらしく、海面には白い波が立ち、それがますます厚く幅ひろくなり、遠い灯台の明りが盛り上がる海流のかたに、現われたり消えたりした。船はドスドスと不気味な音をたてて、大きく揺れた。船内では、暗いランプの下に四人が坐り、酒盛りの仕度をしていた。大滝が一升瓶を持って音吉と軍次郎に注ぎ、段六に注ぐうとするが、船が揺れる